

鶴ヶ島の自然の恵み

鶴ヶ島市民の森の鳥類調査



2017年10月

特定非営利活動法人
つるがしま里山サポートクラブ



民間林の間伐支援



河川の清掃(ホタルの生息)



災害復興支援(気仙沼)

はじめに

NPO法人つるがしま里山サポートクラブは、「みどりと川の再生」に取り組んでいます。市民のみなさんに里山の大切さを理解していただくため、市民の森に住み、または飛来する鳥の鳥類図鑑を作成しました。

この冊子が市民の森や、小川の清掃活動を通じ、自然の奥深さや多様性に気づききっかけになることを願っています。

鶴ヶ島市内の鳥類調査

①趣旨:鳥類調査は、大規模な里山における現存または飛来する鳥類の調査を行い、生態系の自然の植物連鎖も含め確認する

②時期:年間を通じて調査し、観察される時期についても確認する。

この調査は埼玉県NPO活動促進助成事業の助成により実現したものです。調査に参加された会員、市民の皆様、関係各位に感謝いたします。

2017年10月

NPO法人つるがしま里山サポートクラブ

目次

1、はじめに	1
2、里山の鳥類調査について	2
3、鳥類編	3
4、野鳥観察の基礎用語	85
5、索引	86

里山の鳥類調査について

NPO法人つるがしま里山サポートクラブは、次の世代である子供たちに里山を残すことを目的とし、市内の里山の保全活動を続けています。里山は、農地の堆肥や燃料を(薪、柴など)の大切な供給地として、大切に維持されてきました。しかし、今日では化学肥料や石油・ガス・電気の普及により、その価値を失い、荒れ果ててきました。

1965年～75年代(昭和40年～50年頃)の高度経済成長期、鶴ヶ島の里山は宅地開発の対象となり、1966年から約30年間で262haが消失し、現在は138haと1/3となってしまいました。こうした激変の中、鶴ヶ島市は、市民緑地制度を活用し、「市民の森」として7ヶ所、14.2haの緑を確保しています。NPO法人つるがしま里山サポートクラブは、このうち3ヶ所の市民の森の維持活動をしています。

高倉6号の森・飯盛川： 清流復活大作戦、イベント、蛍、オオムラサキ飼育
五味ヶ谷5号の森： 親子イベント、タケノコ、流しソーメン、門松作り
藤金8号の森： プレイパーク、ツリーイング、協働イベント開催

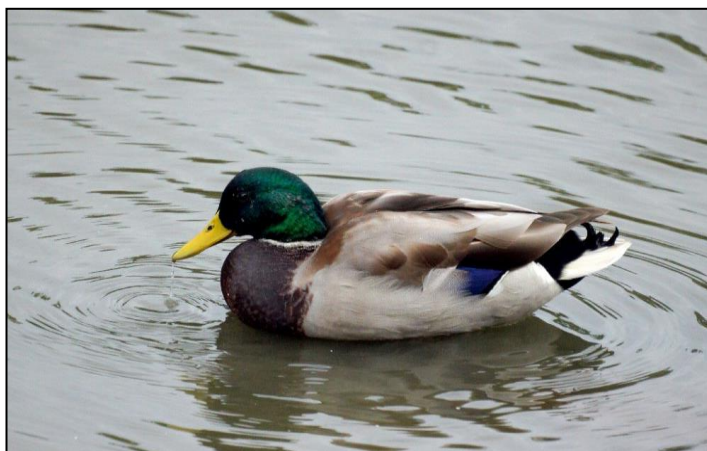
今年度の調査対象の主となった高倉の市民の森は、8.4haの里山。樹林地であり、鶴ヶ島市内で最も大きな自然が残る場所で自然の生態系をそのまま目にすることができる貴重な場所となっています。



キジ

分類		キジ目	キジ科	キジ属								
観察場所	林	農耕地	河川	草原								
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

鮮やかな色彩の国鳥で、童話のなかでも勇気ある鳥として子供たちにも親しまれている。脚の感覚細胞が人体に感じない地震の初期微動をいち早く感じとるため”キジが鳴けば地震がくる”と言われ、科学的にも証明されている。名前の由来は古名の「きぎす」が略されて「きじ」となった。きぎすは「キーギーと鳴クス」という成り立ちの言葉で、スは比較的大きな鳥をしめす接尾語。本州および四国、九州に分布しているが北海道と対馬のキジは亜種コウライキジで一線を期する必要がある。



マガモ

分類	カモ目	カモ科	マガモ属									
観察場所	海岸	河川	湖沼									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

頭の色から青首とも呼ばれる代表的なカモだが光の当たりかたや個体差により紺色や紫色、緑色に見える(オスのみ)

交雑種が多く混乱をまねく。冬の間は一夫一婦となるが通常その後の子育てはメスのみが行う、つがいは毎年再形成される。おもに夜間に陸上に上がって餌をとったりする。公園などで餌付けされていることも多いが、マガモは比較的餌付きにくい。昔よく食べられていたカモ肉とはこの青首のことである。



カルガモ

分類 カモ目 カモ科 マガモ属

観察場所 海岸 河川 湖沼 市街地の公園

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

都会の公園にも1年中いるなじみ深いカモ。カモでは珍しい、ほぼ雌雄同色で冬場はおおきな群れをなす。つがいは毎年新たに形成される。遠くから見ても顔が色白ですぐに識別できる。晩春から初夏にかけて草むらなどに皿状の巣を作り約10個ぐらいの卵を産む。

日本にいるカモ類の中では最大で、重いのになぜ『カルガモ』と呼ばれているのか名付けの由来は不明である、一説に「日本書紀」に現在の奈良県の軽池にいたことから、カルガモという説もある。



ヒドリガモ

分類	カモ目	カモ科	マガモ属									
観察場所	海岸	河川	湖沼									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

白っぽい額が特徴ですぐ識別できる。アオサなどの藻類を好んで食べるが養殖のりを食べ被害をだすこともある。ほかのカモ類より陸に上がって草の葉や草の種子を食べることが多くそのため、くちばしが短く適応している。冬に普通にみられ、ほかの淡水ガモより海上に出る傾向がある。全国で冬鳥 名前の由来は頭部の赤い色から「緋色の鳥」で呼ばれるようになった。交雑種も多く混乱する。



コガモ

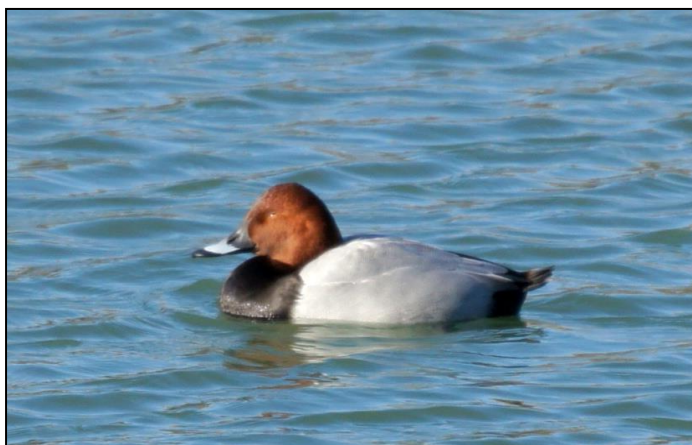
分類 カモ目 カモ科 マガモ属

観察場所 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

ほかのカモがあまり来ない小さな農業用貯水池や公園の池にもいる、小さなカモ、冬やって来るカモの中では一番早くきて、一番遅くまでいるカモ、暖かい日本が好きなのか？雄はエクリップスで雌に似るが全体に濃色、眉斑は不明瞭で、翼の白帯の幅は広い。周囲にアシ原がある様な浅い場所、入り江の岸边を好む。本州山地、北海道では繁殖例もある。少数渡来する、亜種アメリカコガモは肩羽の水平白線はなく、側胸に垂直の白線が出る。



ホシハジロ

分類 カモ目 カモ科 スズガモ属

観察場所 港湾 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

茶色い頭と黒い胸、白い羽根、大きな池のカモ類の混群でもすぐ判る中型のカモ、本来、海ガモだが埼玉西部の淡水池などにも群れで多くいる。潜って餌を採る、動物質のものを好む。虹彩はオスは赤茶色で雌は黒に白いアイリングがある。食性は雑食性で植物の種子、葉、芽、地下茎、魚類、両生類やその幼生、昆虫、甲殻類、軟体動物なども食べる。抱卵はメスのみが行う。名前の由来でハジロは白い羽根だが、何が「ホシ」だかは不明である。



キンクロハジロ

分類 カモ目 カモ科 スズガモ属

観察場所 港内 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

黄色い目(金)の黒い体に白い羽根という意味でこの名前が付いた。北海道では一部に繁殖地となっている所もあるが本州では冬鳥、スズガモに似ているが背中がスズガモは灰色(白と黒の細かい縞模様)。頻繁に潜っては餌を採っている。内陸の池に多く、海上に出ることはあまりない。公園の池で見かけることも多く、パンなどに餌付くこともある。この場合も、潜水して淡水ガモの下で餌をとることが多い。



カイツブリ

分類	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ属									
観察場所	港湾	河川	湖沼									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

カイツブリ類は淡水の池や湖沼に一夫一婦のパートナーと共同で営巣し抱卵・育雛も交代で行う。巣は水草の茎や葉を大量に集めて作る。親が巣を離れる時は卵の上に葉等を被せて隠す。カイツブリは陸上が苦手な逃げ・隠れるはすべて水の中である。

カイツブリの名前の由来は水を掻いて潜ることを意味する『かきづぶり』という語が転訛したもの。



キジバト

分類 ハト目 ハト科 キジバト属

観察場所 林 農耕地 市街地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

別名ヤマバトとも呼ばれる、人をあまり恐れず庭先・公園などにも現れる。非繁殖期には小群を組み、繁殖期にはつがいで行動する。キジバトの親は雛に授乳する。いわゆる”ピジョンミルク”である。喉元の肥大化した素囊(そのう)の剥離した細胞が栄養液として口うつしで雛に飲ませる。名前の由来はキジに似ているからだが、キジのメスに似ている。



カワウ

分類 カツオドリ目 ウ科 ウ属

観察場所 港湾 干潟 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

沿岸の海水域から内陸の淡水域までを行動圏とする。婚姻色で頭が白くなる。潜水の名手で潜って魚をとり浮上して飲み込む。大きなコロニーを作ると糞で林一面が雪が降った様に白くなる。潜水が得意な反面、水面からの飛び立ちに時間が掛かる。最近個体数が増加した影響から海上でも見られる。カワウのおもな餌であるコイなどが無計画に人の手で放流され川の上流にも生息域を拡げている。胸部の白いのは幼鳥、若鳥である。長良川の鵜飼はウミウで行われている。



ゴイサギ

分類 ペリカン目 サギ科 ゴイサギ属

観察場所 海岸 水田 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

白く長い2本の冠羽が目印。幼鳥はホシガラスの様な白い点々とした模様である、昔は幼鳥を別種のホシゴイ、としていた。虹彩も幼鳥時は黄色だが、成鳥になると濃いオレンジ色となる。育雛期には昼にも採食に出かけ、雨や曇りの日にも動くことはあるが基本的には夜行性。日中は樹上で、休息し薄暮時から池沼や水田、アシ原に出て、ザリガニやカエル、ドジョウやフナなどの魚類を捕食。早朝にねぐらや巣に帰る。昆虫も大事な食糧で「ハタネズミ」などの小動物も食べる。



ササゴイ

分類 ペリカン目 サギ科 ゴイサギ属

観察場所 河川 湖沼 水田

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

危険を感じると細長い体型を活かしてヨシに擬態する。また、木の葉の破片などを疑似餌として水面に落とし近づいてきた獲物を捕獲する。食べるものは魚類や両生類甲殻類などを食べる。巣は樹上に作り雄が木の枝等の材料を集め雌が組合わせる。産卵後は雄雌交代で抱卵する。3週間くらいで孵化する。名前の由来は擬態したときの羽根が笹の葉に似ているから。



アオサギ

分類 ペリカン目 サギ科 アオサギ属

観察場所 港湾 干潟 河川 湖沼 水田

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

日本で最大のサギで全国に分布。高木の樹上や梢に小枝や枯れ草を使って大きな巣を作る。沼や川でウシガエルや大きな魚も獲ってそのまま飲み込んでしまう。全体に明るい青灰色だが初列雨覆と風切が黒く、飛ぶと目立つ日本海側に繁殖地が多かったが減少しつつあり反対に関東地方が増殖しつつある。性格は攻撃的で自分より大きな鳥(ミサゴやツルなど)から餌を奪うこともある。



ダイサギ

分類	ペリカン目	サギ科	アオサギ属									
観察場所	港湾	干潟	河川	湖沼	水田							
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

大きさはアオサギよりやや小さいが餌の獲り方などは類似している。夏は目先のいろが青色になる。ちなみにチュウサギの目先は黄色でコサギは赤色で大・中・小で青・黄・赤と信号機みたいで識別し易い。昼行性で川や湖沼、水田、湿地、干潟などで、魚類や両生類、甲殻類を捕食、小型哺乳類も食べる。獲物を見つけるとS字に曲げた首を瞬間的に伸ばし長いくちばしで挟んだり、突き刺したりして捕える。



コサギ

分類 ペリカン目 サギ科 コサギ属

観察場所 港湾 干潟 河川 湖沼 湿地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

北海道は夏場だけだが本州・九州ではほぼ1年中見られる。趾は黄色が特徴だが婚姻色で赤くなる。昼行性でドジョウ・フナ・ウグイ等の魚類、カエル、ザリガニ等も食べる。水中を歩き回って餌を探す時片足を水中でブルブルと振動させ隠れていた餌が逃げ出すところをとらえる。名前の由来として白いものを古語で「さやけき」と呼んでいたことからサギと呼ぶようになったのではという説もある。



バン

分類 ツル目 クイナ科 バン属

観察場所 水田 河川 湖沼 湿地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

顔面に嘴の中ほどまで大きく張り出しいる赤い額板が最大の特徴であり見誤ることのない種である。泳いだり水際や浮草の上を歩き回りながら水草や昆虫、貝やオタマジャクシ、など何でも食べる雑食性である。一夫一婦もあるが一夫多妻もあり後者は巣を共用しているので1つの巣に卵が十数個のときもある。名前の由来は水を張った水田にしばしば現れることから「田の番をする鳥」という意味の呼び名になった。



オオバン

分類 ツル目 クイナ科 バン属

観察場所 水田 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

クイナ類の中では最も泳ぎが上手である。これも趾がシダの葉の様に弁足で水かきの代わりにしているからだ。水草を好んで食べるがそのほか昆虫類や甲殻類・貝等も食べる。冬場は大きな群れの集団となる。警戒心は多くのクイナ類と同様に強く、危険からは得意の潜水で遠ざかる。死んだ魚等も食べるが鯉のような大きな魚を飲み込むことが出来ず何回もくわえなおし最後に諦めることもある。



カッコウ

分類	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ属									
観察場所	アシ原	平地～山地の疎縁	草原									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

日本全国で夏鳥。明るい林やまばらに木の生えた草原、アシ原など開けた場所を好む。カッコウの特徴といえば托卵であろう。他の鳥の巣に卵を産み付け孵卵をまかせ育児放棄することである。このとき卵の数合わせに他の卵を1個巣から落としてしまう。そして、ひなは孵(かえ)ると他の卵を巣から落としてしまう、仮親が運んでくる餌を独占するためだ。昆虫類を主食とし、他の鳥が嫌う大型の毛虫も好んで食べる。名前の由来は、鳴き声そのものが鳥名になっており、諸外国でも同様という珍しい例。



アマツバメ

分類 アマツバメ目 アマツバメ科 アマツバメ属

観察場所 高山の島 海岸の崖

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

飛翔中の翼の形が三日月型で大きく背中側腰部に白い帯状がある。子育て関係以外は殆ど飛び続け空中生活を続けている。このため脚が退化し他の鳥の様に木の枝に止まることができないし、地上に降りると飛び立つことが出来ない。休む時は垂直な崖などに鋭い爪でぶら下がる。九州以北で夏鳥として渡来するが分布は局部的、海岸や島、高山の崖の集団営巣地で繁殖する。雨や曇りの日には低く飛ぶことが名前の由来。



クサシギ

分類	チドリ目		チドリ科				チドリ属					
観察場所	水田	河川	湖沼	湿地								
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

内陸の湖沼・河川・水田などを好み、海岸へ出る事はない。夏羽は頭から胸背中までコントラストの高い白黒の縞模様だが冬羽は全体的に褐色の地味な模様となる。日本には冬鳥として渡来する。関東以南では少数が越冬する。水辺や砂泥地を歩き、おもに水面にいる昆虫や甲殻類、軟体動物を食べる。シギ類にはめずらしく樹上にも営巣。ツグミ類やリスなどの古巣を利用することもある。



イソシギ

分類 チドリ目 シギ科 イソシギ属

観察場所 水田 河川 池湖 干潟

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

国内各地で繁殖する、肩にくい込む白色部分が特徴的。夏羽と冬羽では大した変化はないが夏羽のほうが少し黒味がある。砂地にくぼみを掘り枯れ草を敷き詰めた巣に4個ぐらい産卵する。昼間はメスが抱卵し夜はオスと交代で分担する。歩行時も静止時もひんぱんに尾羽を上下に振るのが特徴。魚も食べるが主食は昆虫で水辺を活発に歩き回りながら採食。飛んでいるユスリカやトンボも食べる。



ユリカモメ

分類 カモ目 カモ科 マガモ属

観察場所 水田 河川 池湖

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

日本の代表的小型カモメ。河川の上流まで姿を見せる、冬鳥として日本の全国に渡来、一夫一婦制だが年ごとにパートナーが変わる。

いつも集団で行動する。東京都の都鳥として親しまれている。

小魚やゴカイ類、昆虫、小果実などを食べる。淡水域にも入ることの多いかもめで、かなり奥地まではいる。奥地のことを古語で『ユリ』からユリカモメと言う名前になった。と言う説が有力。



ミサゴ

分類 　　　　　　　　　 タカ目 　　　　　 ミサゴ科 　　　　　 ミサゴ属

観察場所 　　　　　 海岸 　 河川 　 湖沼

観察時期 　　　　　

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

鋭い趾の爪で生きた魚を捕える漁の達人、全国的に分布しているが生息数が減少しているため、観察する機会が少ない。レッドリストで準絶滅危惧種に指定されている。漁は主に大きなボラやスズキなどを捕まえる。魚を食べる猛禽にはオオワシ、オジロワシ、シマフクロウなど他にもいるが、それらは死んだ魚を食べるほうが多く、生きた魚だけを捕らえて食べるのはミサゴだけである。魚を獲る時、水中に足から突っ込む生態から「水探る」が転訛してミサゴとなった。獲った魚を貯蔵し自然発酵したものを人間が食べたのが寿司の起源とか。



トビ

分類	タカ目	タカ科	トビ属									
観察場所	林	農耕地	草原									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

最も普通に見られる身近な猛禽、日本のタカ類では唯一凹尾。雌雄同色。ほぼ全身が褐色だが翼下面の翼角に白い斑が飛翔中の目印でもある。名前は、優れた飛翔力から、『飛び』という言葉が語源になった。おもな食べ物は死んだ魚や鳥獣で漁港のゴミ捨て場をあさる姿がよく見られる。非繁殖期には数十羽から数百羽の集団ねぐらを形成。寒くなるにつれて大きな集団となる。



ツミ

分類	タカ目	タカ科	ハイタカ属									
観察場所	林～市街地								草原			
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

平地から山地の森林で繁殖する、西日本では少い。日本で一番小さなタカ、漢字で書くと雀鷹と書く、名前もスズメタカから転訛。巣は林縁や道路添いの針葉樹に作る。5月中旬頃の産卵となる、気が強いため巣に近づくと攻撃を受けることもある。そのためツミの巣の近くに巣をつくる他の鳥もいる。餌はスズメやシジュウカラなど小型鳥類で昆虫類も捕食する。秋には殆どのものが東南アジアへ渡り、少数が本州南の暖地で越冬する。最近は都市近くの林で繁殖するなど都市化が増えている。写真はムクドリを捕食



オオタカ

分類	タカ目	タカ科	ハイタカ属									
観察場所	林～市街地		農耕地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

一時は準絶滅危惧種に指定されたが、かなり復活してきた。行政側は指定解除、自然保護団体側は継続と揉めている。都市部への繁殖を拡げたようだ。雌雄同色で胸、腹部は白味が強く飛翔中のオオタカは白く見える。森林をすみかとするが、その付近の農耕地や住宅地にも現れて獲物を狩る、おもにハトやムクドリなどの鳥類を襲い、ネズミやウサギなどの哺乳類を狩ることもある。地方では農家のニワトリを襲う事もある。



サシバ

分類	カモ目	カモ科	マガモ属									
観察場所	水田	平地～山地の林	湿地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

繁殖を終えたタカが南の越冬地へ向かう姿を”タカの渡り”といいサシバはその代表格で大集団で上昇気流に乗って円を描くように帆翔する姿をタカ柱という。山地の林縁の樹木にとまっている姿をよく見かける、高い所から地上のカエルやヘビ、トカゲなどを見つけ鋭い脚の爪で捕らえる。バッタやセミなどの昆虫やネズミや小鳥なども襲うことがある。



ノスリ

分類	カモ目	カモ科	マガモ属									
観察場所	農耕地	平地～山地の林	草原 河川敷									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

とまるとずんぐりダルマの形をしているので俗称”ダルマダカ”と呼ばれている。ノスリの名前はネズミなど獲物を獲るとき急降下から超低空飛行で腹が地面に擦れるからと言われているが未だ一度も見たことが無い。高い木や電柱の上から ネズミ、カエル、ヘビ、昆虫、小鳥をみつけて捕食する。上から襲うと言うより後ろから襲う感じ。巣づくりは3月に始まり4月に生まれたひなにはモグラなど与えることが多い。飛行中を下から見上げると翼下面の翼角部が暗褐色の斑が見える。



アオバズク

分類 フクロウ目 フクロウ科 アオバズク属

観察場所 港湾 河川 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

日本全国で夏鳥。名前どおり青葉の季節にやって来る。群れは形成せず単独もしくはペアで生活する。昼間は高い樹木の枝でジッとじていて寝ているようだが夕方から活発に活動する。食性は昆虫類、両生類、小型の鳥類、小型の哺乳類などを食べる。顔盤が発達していないため普通の鳥の様にも見えるフクロウ属らしからぬ風貌をしている。市街地の社寺林や大木のある公園で繁殖することもある。



カワセミ

分類 ブッポウソウ目 カワセミ科 カワセミ属

観察場所 湖沼 平地～山地の池

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

コバルト色の美しい清流の宝石。全国の平地～山地の池や湖沼の水辺にすみ海岸や離島でも見られる。雌の下嘴は赤い。水面に張り出した木の枝や岩、杭等に止まって水中の獲ものをダイビングして捕える。また水面をピョンピョン跳ねるように飛び回り小魚おいかける個体もいた。太田ヶ谷沼のカワセミがそれを見せてくれた。縄張り意識が強く繁殖期以外は単独で行動する。



コゲラ

分類 キツツキ目 キツツキ科 アカゲラ属

観察場所 平地～山地の林

観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

スズメぐらいの大きさに市街地の公園等でも見られる小型のキツツキ。後頭部両側に目立ち難いが小さな赤い斑があるのがオス。コゲラが都市部に増えた理由として過去の緑化運動の樹木が老木化しコゲラでも穴が明けられるようになり巣作りし易くなったためと考えられる。餌は樹木にいる昆虫でとくに幼虫を好む、また蜘蛛等も食べる。短い嘴に昆虫の幼虫を7～8匹メザシのように器用に並べてくわえているのを見た、巢の雛に持ち帰るのだろう。



アカゲラ

分類 キツツキ目 キツツキ科 アカゲラ属

観察場所 平地～山地の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

北日本に多く生息する普通種、明るい落葉広葉樹林を好むが針葉樹林でも見られ、農耕地や都市近郷の雑木林でも繁殖する。オスは後頭部が赤いがメスは黒い。幼鳥時はオスメス共に頭頂部が赤い。木の幹を縦に登りながら樹皮を嘴でつつき時には皮を剥いで中にいる昆虫の幼虫やクモを長い舌を伸ばしてからめとり食べる。秋・冬にはノイバラの実も食べる。舌の先端は餌を獲り易くするためブラシ状になっている。



アオゲラ

分類 キツツキ目 キツツキ科 クマゲラ属

観察場所 平地～山地の林 寺社林 公園

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

後頭部から背中茶色に近い緑色、胸、腹は白く黒い横斑はある。ヤマゲラに似るがヤマゲラはこの横斑がない。常緑広葉樹林にすみ冬季は市街地の社寺林や公園にもすがたを現す。雑食性で樹皮下の甲虫の幼虫や地上のアリなども捕食する。秋・冬には木の実を食べ、カエデの樹皮をつついて樹液をなめたりする。



チョウゲンボウ

分類	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ属									
観察場所	農耕地	河川	草原 市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

停空飛翔で獲物を狙うハンター,主にネズミやモグラなど哺乳類やスズメなど小さな鳥類、イナゴなどの昆虫類を捕食、狩りはホバリングで獲物を探す場合と高い木にとまり地上の獲物を探す2通りある。近年は人工建造物に営巣するようになった。名前の由来は不明だが一説によればトンボの古い呼び名のゲンザンボーから、ホバリングを下から見るとトンボの様に見えることから鳥ゲンザンボーと呼びそれがチョウゲンボウとなったという説



ハヤブサ

分類 ハヤブサ目 ハヤブサ科 ハヤブサ属

観察場所 海岸の断崖 河川敷 農耕地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

小鳥を空中で蹴り落とす最速のハンター。崖の上や樹の上などで見張りをしハトやヒヨドリなどやや大き目の鳥を狙う。獲物を見つけると飛び立ち飛んでいる鳥を脚で蹴り落として捕える。生き物の中で最速の記録保持者と言われているがこれは水平飛行ではなく急降下の時で実際387Km/hの計測記録がある。水平最高速はオオグンカンドリの154Km/hでハヤブサは100Km/hと及ばない



モズ

分類	スズメ目	モズ科	モズ属								
観察場所	農耕地 林縁	河原	市街地								
観察時期	1	2	3	4	5	6				11	12

モズは肉食性で猛禽類のような鋭いカギ状の嘴をもつ、バツタ類、カエル、トカゲなどのほか、ときにはスズメやツグミ、ノネズミなどかなり大きなものまで捕える。捕った獲物を枝に刺しておく「はやにえ」の習性があるがその意味については縄張り説、貯蔵説、食べ残し説など諸説ある。時々他のいろいろな鳥の鳴き声をつぶやくような小さな声でまねする、これが百舌という当て字となった。カッコウに托卵されると怒って自分より大きなカッコウを殺してしまうこともある。



オナガ

分類	スズメ目	カラス科	オナガ属									
観察場所	林	農耕地	市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

昔は関東地方にだけいたのでムサシドリと呼ばれていた。今は中部地方や東北南部にまで広がっている。公園などに毎日同じ時間帯にやってくる。時間に正確な鳥だ、人間の近くで生活しているが警戒心は強い。雑食性で昆虫や木の実をよくたべる。水辺で魚をとることもあり、ほかの鳥の巣を襲って卵やひなを奪う事も有る。雌雄同色



カケス

分類 スズメ目 カラス科 カケス属

観察場所 平地～山地の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

カケスはシイやナラなどのドングリやクリガが好物で食べものの少ない冬に備えて蓄える性質がある、落ち葉の中に埋め込み蓄えられてドングリの一部は春に芽吹いて成長するこれが森林を成長させカケス自身の食物の確保につながる。木の実ばかりでなく昆虫や種子も食べ他の小鳥の雛を食べることもある。カケスはほかの鳥の声、特にワシ・タカ類の鳴き声をよくまねる。またネコの鳴き声や物音をまねることもある。



ハシブトガラス

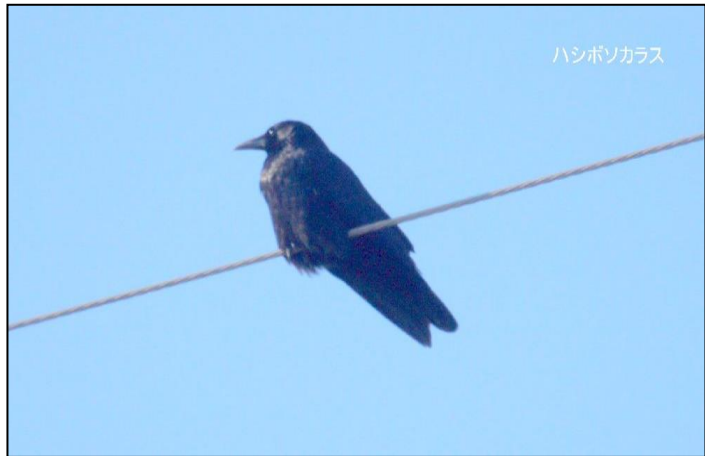
分類 スズメ目 カラス科 カラス属

観察場所 市街地 平地～山地の林 農耕地 海岸

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

したたかに都市環境に適応し最も普通にみられる都会派カラス。雌雄同色、額が高く張り出し嘴が太く湾曲しているのが特徴。繁殖期には攻撃的で、知らずに巣に近づいても攻撃をうける。雑食性で何でも食べる。漁港、魚市場、ゴミ集積場、家畜飼育場、人の廃棄物を求めてさまざまな場所に飛来する。スカベンジャー（腐肉食動物）で環境保全としては有益だが人間にとってはゴミをあさり散乱させる嫌われ者である。



ハシボソガラス

分類	スズメ目	カラス科	カラス属									
観察場所	農耕地	河原	草地 市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

雌雄同色。農村を生活の場とする郊外派カラス。郊外派といえかなり都会に進出している。昔はカラスといえばハシボソガラスだった。鳴き声はガーガーと濁った鳴き声である。仙台などで停車中の車のタイヤの前にクルミの実を置いて殻を割らせる事をするのも本種である。名前の由来は今はカラスのなきごえは「カー、カー」とききなしているが昔は「カー、ラー」と聞きなしていたという。それで「カーラーす」とよびカラスとなった”す”は比較的大きな鳥を意味する接尾語



ヒガラ

分類 スズメ目 シジュウカラ科 ヒガラ属

観察場所 山地～亜高山の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

雌雄同色。針葉樹林を好み繁殖期は主に樹上で生活する。樹幹部をせわしく飛び回り葉の茂みにいる昆虫やクモ類をたべ幹や枝の隙間に潜む昆虫を嘴でほじくり出して捕える。また草木の種子等も食べる。冬は低い所へ移動しユガラやキクイタダキなどと混群をつくることもある。シジュウカラにそっくりだが識別は胸に黒い筋模様(ネクタイ)がなくシジュウカラより一回り小さく、尾羽も短い。



ヤマガラ

分類 スズメ目 シジュウカラ科 コガラ属

観察場所 山地～亜高山の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

マツ林や雑木林でも姿を目にするが、シイやカシなどの常緑広葉樹林を好むため西日本に多く北海道では少ない。昆虫の幼虫や成虫、クモ類を捕食する。冬に備えて樹皮などに種子を差し込んで蓄える習性がある。昔は飼育して芸を覚えさせたが、このような事ができるのは世界でもヤマガラだけである。伊豆諸島南部に日本固有亜種で数が少ないオーストヤマガラがいる、絶滅危惧Ⅱ類に指定。



シジュウカラ

分類 スズメ目 シジュウカラ科 シジュウカラ属

観察場所 市街地 平地～山地の林 河原

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

鳴き声がジユク、ジユク、シジュ、シジュときこえることから四十、四十と聞きなしてシジュウカラとなった。市街地でも普通に見られる。黒いネクタイ姿が特徴のガラ類、メスはネクタイが細く、脚のところで切れているが、オスは尾羽までネクタイが延びている。雌雄ほぼ同色。繁殖期は樹木の枝上で昆虫の成虫や幼虫、クモ類をよく捕食する。地上に舞い降りて落ち葉などを嘴でひっくり返し、ミミズなどを探すこともある。



イワツバメ

分類 スズメ目 ツバメ科 イワツバメ属

観察場所 断崖 平地～高山の岩場 構造物

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

尾羽がツバメより短く腰の部分が白い。山間部の崖、高山や海岸の岸壁に集団で営巣するが最近では橋梁、学校、駅などでも繁殖するようになった。ツバメのように人工構造物に営巣する比率が高くなると都市化が進み生息パターンも変わってくる。北海道から九州以北に夏鳥として渡来する。巣の上部は天井や壁面に張り付いていて横に出入り用の穴がある。スズメに巣を横取りされることもある。森の上などを群れで飛び、飛翔昆虫を捕食する。



ツバメ

分類	スズメ目	ツバメ科	ツバメ属									
観察場所	農耕地	河川	市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

雌雄同色。代表的夏鳥として北海道南部以南に春一番に南からやって来る。民家など人工物に巣を作る、人間が多い所に巣を創る傾向がある。人間が雛を守ってくれると信頼しているのだろう。秋になっても南に帰らず越冬するツバメもいる、南に帰るのも大変なのだろう。しかし。異常寒波に襲われて全滅死してしまうこともある。温暖化とはいえ越冬は時期尚早である。渡り際の死亡率が高いが、生きているものは毎年同じ巣またはその近くの巣への回帰率が高いという。



ヒヨドリ

分類 スズメ目 ヒヨドリ科 ヒヨドリ属

観察場所 市街地 平地～山地の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

何処でも見られる賑やかな鳥。桜の花の蜜を吸い、カキの実、畑の野菜も食べるが青汁の原料となるケールの葉もついばむ、適応力がたかくいろいろなものを食べる。繁殖期には昆虫やクモを好んでたべる。キャベツ、ハクサイ、果実と手当たり次第になんでもたべるので農家の嫌われ者であるが花粉を媒介したり、植物の種子を遠くに運ぶ役割も果たしている。



ウグイス

分類 スズメ目 ウグイス科 ウグイス属

観察場所 平地～山地の林 市街地の緑地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

有名な雄のさえずりから、コマドリ、オオルリと共に日本三鳴鳥の一つとされ、ホーホケキョ は縄張り宣言 ケキョケキョケキョ は威嚇だといわれている。「梅にウグイス」とよくいわれているがメジロと混同されている、梅の花の蜜を吸いに来るのはメジロである。ウグイスはササが茂る林を好み、やぶに潜んで暮らす、そのため夏場は見つけにくくさえずりは聞かれなくなっても葉の落ちた冬のほうが観察しやすい。冬期は市街地の公園や庭にも現れる。



エナガ

分類 スズメ目 エナガ科 エナガ属

観察場所 平地～山地の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

小さい体に長い尾羽が愛らしいおしゃべりな白っぽい小鳥。さまざまな森林で暮らしているが自然林よりも植林地などの二次林で多く見られる。非繁殖期は群れを作る習性が強く冬期は数羽～数十羽の群で生活。ヤマガラやシジュウカラ、ヒガラなどと混群になることも多い。巣づくりは鳥界で最高に巧妙な巣を雌雄でつくる。クモの糸でスギゴケなどの藻類を丸くまとめて袋状につくり外側にはウメノキゴケを貼り付け樹皮に似せ産座に大量の羽毛を敷く。7～13個を産卵。メスが抱卵。



センダイムシクイ

分類 スズメ目 ムシクイ科 ムシクイ属

観察場所 平地～山地の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

初めてこの鳥名を目にした時は仙台ゆかりの鳥かと思ったのは私だけではないと思う。鳴き声のチョ、チョ、チョ、ピーから千代千代となりそれがセンダイと読まれるようになった。ムシクイ類はどれも姿がよく似て識別が難しいがセンダイムシクイは平地の広葉樹林、メボソムシクイは亜高山の針葉樹林、イイジマムシクイは伊豆諸島の照葉樹林で住み分けられ鳴き声もメボソムシクイはジュリジュリ、ジュリジュリ。イイジマムシクイはチュルチュルチュルと全く違うことで識別できる。写真だけの識別は困難



メジロ

分類 スズメ目 メジロ科 メジロ属

観察場所 平地～山地の林 市街地の緑地

観察時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

春にはツバキ、ウメ、サクラ、などの花の蜜を吸いに秋には熟した柿の実をついばみに、と人家の庭先でも普通に見られる鳥。 人に対する警戒心もあまり強くないので驚かさない範囲に近づいてゆっくり鑑賞できる。ほぼ全国に分布する留鳥だが、体の上部が黄緑色しており小さいため広葉樹の葉によく溶け込めます。このため常緑広葉樹林に多く、西南日本の椿の多い林に高密度で棲息している。反面、北海道には少ない。



オオヨシキリ

分類 スズメ目 ヨシキリ科 ヨシキリ属

観察場所 湖沼 平地～山地の河原 湿地の芦原

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

大きな赤い口をあけて仰々しくさえずる、アシ(ヨシ)原で暮らす大きなヨシキリ。ヨシの茎を切って中の虫を捕食するところからこの名が付いた。またアシ(ヨシ)原にしか住まないのヨシ限(きり)となった説もある。オスはメスより早く渡来し繁殖地に着くと縄張りを宣言するために夜も昼もさえずり続ける。初夏のアシ(ヨシ)原でギョギョシ、ギョギョシと賑やかにさえずる声聞きこえたらオオヨシキリがいると思って間違いない。



ムクドリ

分類	スズメ目	ムクドリ科	ムクドリ属																					
観察場所	農耕地	草原	市街地																					
観察時期	<table border="1"> <tr> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td> </tr> </table>												1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12													

棕(むく)の木の洞に好んで営巣し、その実を食べる事からその名が付いた。農耕地で耕運機の作業しているとムクドリが集まってきて耕した土の中からでてきた昆虫の幼虫を食べにくる。雑食性で樹木の実も良く食べる夏から春までの非繁殖期は群れを作り電線や大木にとまる。また都会では街路樹を埒(ねぐら)とするので夕刻は騒がしくまた大量の糞で悪臭が発生する。この公害の対策として一匹捕まえてムクドリの鳴き声(警戒音)を録音し大音量で流したら逃げ出して再び来なくなったという。



トラツグミ

分類 スズメ目 ヒタキ科 トラツグミ属

観察場所 低山～亜高山の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

夕暮れから未明まで聞こえてくる長い口笛のような声は遠くまで響き少々不気味に思う人もいる。曇った日も良く鳴く。ツグミ類の中でも最も大きい。全身が黄色と黒のトラ模様。日本でよく見られているのは亜種トラツグミで地上で落葉を嘴ではねのけ昆虫、ミミズなど採食し営巣は樹上で行う。トラツグミは昔の名前でヌエ(鶺鴒)と呼ばれていた漢字でみても空(むな)しい夜の鳥と書く、照明に乏しい昔の人は闇夜が怖かったのだらう。



シロハラ

分類 スズメ目 ヒタキ科 ツグミ属

観察場所 平地～山地の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

暗めの林で越冬する白っぽい腹のツグミ。地上で落葉を嘴ではねのけながら昆虫やミミズを探して食べ木の实も好んでたべる。分布は西日本に多く平地から低山の広葉樹林や樹林の多い自然公園のような所にすみ、林床にササなど下草が茂った場所に良く見られる。北方より越冬のため渡来、とくに西日本に多い。中国山地や対馬で繁殖例もある。



ツグミ

分類	スズメ目	ヒタキ科	ツグミ属									
観察場所	農耕地	平地～山地の林	河原 市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

冬にちょっと郊外に出れば必ず見かける冬鳥の代表格。草地や農耕地では地面を掘り返してミミズなどを引っ張り出してよく食べています。雪が積もったり地面が硬く氷結した時はナナカマドの赤い実などを好んで食べる。また熟した柿なども良く食べる。地上に降りている時間も多い様でよく上を見るポーズする。日本へは群れで越冬のため山地に渡来しその後平地や暖地に分散する。晩春に再び集結して群れをなして北方への帰路につく。



アカハラ

分類 スズメ目 ヒタキ科 ツグミ属

観察場所 平地～亜高山の林

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

雌雄同色とまでいかないがメスはオスよりやや白っぽい、明るい林に棲む代表的な大型ツグミ類のひとつで胸から脇腹へのオレンジ色が目立つ。地上を歩いてよく地面を掘り返し、潜んでいる昆虫を捕食する。地面にいる時は警戒心が強くちょっと近づくとう飛び立ってしまうが、木の枝に止まっている時は比較的近寄って撮影できます。



ルリビタキ

分類 スズメ目 ヒタキ科 ルリビタキ属

観察場所 低山～亜高山の林 市街地の緑地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

オスは上面が青、胸、腹が白、脇がオレンジ色でメスは尾羽のみ青色でその他上面はオリーブ色、胸、腹、脇はオス同様。若いオスは背は青色に斑模様にオリーブ色が混じっている、約3年ぐらいできれいなルリ色の羽が出来上がると言われている。春、夏は針葉樹林内で昆虫やクモなどを捕食し、秋、冬は木の実などの植物質も食べる。オオルリ、コルリ、とならぶ「青い鳥御三家」の一角でもある。



ジョウビタキ

分類 スズメ目 ヒタキ科 ジョウビタキ属

観察場所 低山～亜高山の林 市街地の緑地

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

ジョウビタキの名前はあたまの上部が白いことから白髪の老人に例えられ、尉(ジョウ:翁と同様な意味)でヒタキは火打ち石で火を起こす時の音のチッ、チッと鳥の鳴き声に似ているから。冬にシベリアや中国北部から渡来する。オスもメスも翼に白い三角形の斑がありジョウビタキであることがすぐ判る。地上で昆虫を捕え、木の実も食べる。四月頃大陸に戻る。



イソヒヨドリ

分類	スズメ目	ヒタキ科	イソヒヨドリ属									
観察場所	港湾	岩礁	沿岸の市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

生息地は主に岩場や崖のある海岸とその周辺の市街地や河川沿いの内陸部などにも現れる。通常は岩場やがけのすき間の営巣するが人家の屋根のすき間も利用する。海辺の地方都市ではビルを崖地に見立てその屋上や屋根のすき間通風口などに営巣することも少なくない。昆虫やフナムシ、カニ、トカゲなどをたべる。おもに地上で採食するが小鳥の巣を襲ってひなを食べることある。



キビタキ

分類	スズメ目	ヒタキ科	キビタキ属									
観察場所	平地～山地の林	市街地の緑地										
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

日本全国で夏鳥、西南諸島で留鳥、鮮やかな黄色と鳴き声は野鳥ファンに人気がある。ほぼ全国的に平地～山地の林で見られ、とりわけ広葉樹林で多く見られる。ヒタキ類の小鳥たちは短い脚と先のとがった基部の広いくちばしをもつ。樹上生活に適しており枝に直立した姿勢で止まりながら飛翔中の昆虫を探す。見つけると飛び立って空中で捕え、止まり場に戻って食べる。ほかには木の実も採食する。



オオルリ

分類 スズメ目 ヒタキ科 オオルリ属

観察場所 平地～山地の林 溪流や湿地沿い

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

日本には夏鳥として渡来し、山地の溪流沿いのよく茂った林にすむ。渡りの時期には市街地の緑地で観察されることもある。オスは盛んにさえずる。その声はウグイス、コマドリとともに日本三鳴鳥とされる美声でメスもさえずることがある。飛翔中のチョウやアブ、羽化した水生昆虫などを捕食。おもに溪流沿いの岸壁や土壁のくぼみにコケを使って営巣する。オスの上部が鮮やかなルリ色でコルリ、ルリビタキと並んで「青い鳥御三家」の一角でもある。



スズメ

分類	スズメ目		スズメ科				スズメ属					
観察場所	農耕地		葦原		草原		市街地					
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

人とともに暮らす最も身近な茶色の小鳥。家の屋根のすき間などの人工物のほか樹洞やまれに樹木の茂みに巣を作る。繁殖期にはクモや昆虫の幼虫を多くとるが他の時期は河原や草地、公園などに小群で生活し草の種子をおもな食物としている。その年に生まれたスズメは秋になると集合して群れをつくる。喉のくろい部分は加齢とともに広がっていく。名前の由来は鳴き声をシュン、シュンとききなしそれに小さな鳥の接尾語のメを付けて「シュンシュンメ」と呼び、スズメとなった。



キセキレイ

分類 スズメ目 セキレイ科 セキレイ属

観察場所 湖沼 溪流 平地～山地の河川

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

- ： オスの喉が黒いのは夏羽で冬は白くなる、メスは夏も白い。おもに水辺の昆虫を食べる、川の中の石や流木にとまっていて昆虫などが上に飛んでいると、ほぼ垂直に上昇し獲物を捕え、元の場所に戻り食べる。
- ： 飛翔はセキレイ類特有の波状飛翔である。屋根の上、樹上、電線などのとまってさえずる。崖のくぼみや樹上、橋げたなどに営巣するが人家の屋根や戸袋、生垣などに巣をかけることもある。



セグロセキレイ

分類 スズメ目 セキレイ科 セキレイ属

観察場所 平地～山地の河原 湖沼

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

日本固有種。尾羽を振る習性や波状の飛びかたはセキレイ類に共通する。平地から山地の河川や湖沼などを好み、海岸近くには殆んど見られない。水辺の昆虫の成虫・幼虫のほかエビなども食べる。空中で飛翔昆虫を捕水辺の環境への依存性が高く都市化が進む中、生息数は減少しつつある。四季を通じてつがいで行動することが多く夜は丘陵の低木林などをねぐらとする、



タヒバリ

分類 スズメ目 セキレイ科 タヒバリ属

観察場所 河川敷 農耕地 草原

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

生息環境や姿がヒバリに似ているが細身で冠羽がないのが識別ポイント。
 本州以南に冬鳥として渡来し草原や水田、河川敷河口に近い海岸で単独
 または小群をなして越冬する。ビンズイと似ているが林の中にはいること
 はない。 地面を歩きながら昆虫やクモのほか雑草の種子もたべる。
 倒木や石などにとまって尾羽を上下に振る。電線や木の枝にとまることもあ
 る。



ハクセキレイ

分類	スズメ目	セキレイ科	セキレイ属									
観察場所	草原	平地～山地の河原	海岸 市街地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

ほぼ雌雄同色だがメスはオスに比べ黒色部がくすみ特に背中黒色はうすい。また胸の黒色部が小さい。北日本で繁殖し本州中部以南で越冬しているが繁殖地は次第に南下し最近では関東地方でも普通に繁殖している。日中縄張り内で行動するが夕方になると別の場所に群れ集まる。多い時は数百羽の大集団になる。橋の下、建築物などなどをねぐらとするが、最近では繁華街の街路樹にも現れるようになった。



カワラヒワ

分類	スズメ目	アトリ科	カワラヒワ属																					
観察場所	農耕地 河原	平地～山地の草地	市街地の緑地																					
観察時期	<table border="1"> <tr> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td> </tr> </table>												1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12													

低山や平地の林、草地や農耕地、樹木の多い公園などに飛来する。秋冬は河原や田畑の周辺で群れで飛んでいる姿が良く見られる。北海道のカワラヒワは本州に渡って越冬。主食は草の種子。草の茎にとまったり地上を跳ね歩いたりしてたべる。堅いヒマワリの種を上手に割って食べるので庭に飛来することもある。ひなには種子の胚乳を与えて育てる。カワラヒワなどのヒワ類は飼い鳥のカナリアに近い仲間。繁殖期には軽快に美しくさえずる。



マヒワ

分類	スズメ目	アトリ科	マヒワ属									
観察場所	平地～山地の林	林縁										
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

秋に大陸から渡って来た直後は本州の山地から亜高山帯で大群が見られることがある。厳冬期には山を降りて山麓や丘陵地帯の針葉樹林やハンノキなどが多い林縁で生活する。主食は木や草の種子。ハンノキやスギ、ヒノキなど松かさ状のすき間にくちばしを入れてこじ開け種子を取り出してたべる。群れで行動することが多く集団で一つの木に飛来して種子を姿が見られる。地上に落ちている草の種子や穀物などもたべる。



アオジ

分類	スズメ目	ホオジロ科	ホオジロ属									
観察場所	農耕地	平地～山地の林	市街地の緑地									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

アオと名の付く鳥は実際に青くない。アオジの青は古語では緑色を指し、全体の印象が黄緑色の鳥なので青鶉と名づけられた。鶉はホオジロ類の総称。繁殖期は山地～亜高山の明るい広葉樹林で生活、特にやぶの多い疎林を好む。秋になると高地から低地へ移動したり、日本列島を南下したりして積雪のない暖地で越冬する。繁殖期には昆虫の成虫や幼虫もよく捕える。



ホオジロ

分類	スズメ目	ホオジロ科	ホオジロ属									
観察場所	河川敷 農耕地	平地～山地の林縁	草原									
観察時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

うっそうとした森林は好まず、まばらに低木のある草地や林の縁で良く見られ、高い枝先にとまってさえずる、まるで、うがいをしている様に見える。全国で留鳥だが、寒冷地にすむものは冬が近づくときと暖地へ移動して越冬する。食物は地上に降りて探すことが多く、非繁殖期はおもに草の種子を食べる。昆虫もよくとり、チョウやガ類の幼虫、バッタ類は繁殖期のひなの餌となる。



ミヤマホオジロ

分類 スズメ目 ホオジロ科 ホオジロ属

観察場所 農耕地 平地～山地の林 林縁

観察時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

日本全国に飛来する冬鳥だが東日本には少ない。越冬数の多い西日本では人里近くにも渡来する。常に小さな群れで行動しているが、ほかのホオジロ類の群れに混じって見られることもある。越冬地ではおもに雑木林やマツ林、竹やぶなどの明るい林で生活している。林内の広いところや林道などでピョンピョン跳ね歩きながら落ちている草の実やマツの種子を食べている姿がみられる。

野鳥観察の基礎用語

季節による移動

留鳥	一年中、ほとんど同じ場所で生活する鳥。あるいは、一年中その地域で見られる鳥。
漂鳥	日本国内を季節によって移動する鳥。夏は山地や北方で繁殖し、秋冬になると平地や南方へ移動して冬を越す。
夏鳥	春～初夏にかけて、繁殖するために南の国から日本へ渡来し、秋になると南の国へ戻る鳥。
冬鳥	秋に北の国から日本へ渡来して越冬し、春になると北の国へ帰って繁殖する鳥。
旅鳥	北の繁殖地と南の越冬地を行き来する途中、春と秋に日本に立ち寄る鳥。
迷鳥	台風の影響やほかの鳥の群れに紛れ込むなど、本来の生息地から離れて日本へ渡来した鳥。

成長

幼鳥	生まれて最初の換羽をするまでの個体のこと。おもに巣立ち直後の個体。
若鳥	生まれて最初の換羽を終えて成鳥羽になるまでの間の個体。
成鳥	成長による羽色の変化(冬羽・夏羽は除く)が起きなくなった個体。
夏羽	繁殖羽ともいい、多くの鳥は春の換羽で夏羽になるがカモ類など冬に繁殖羽になる鳥やスズメなど繁殖羽にならない鳥もいる。
冬羽	非繁殖期の羽、普通夏羽よりも地味な色になる。
換羽	定期的(多くは一年周期)に古い羽が抜け、新し羽の生え換わること。
エクリブス羽	繁殖を終えた、おもにカモ類の雄の羽色のこと、雌の羽色のように地味になる。

生活・行動

さえずり	繁殖期に縄張り宣言したり雄が雌を誘う時にだす声。
地鳴き	仲間を呼んだり、警戒した時にだす声。
混群	違った種類の鳥が一つの群れをつくり行動すること。非繁殖期のカラ類などによく見られる。
帆翔	気流などを利用して羽ばたかずに飛ぶこと。
滑翔	羽ばたきと羽ばたきの間に入れる羽ばたかない飛翔。ヒヨドリなどに見られる。(波状飛翔)
滞空飛翔	翼と尾を動かして空中の一点に停止する飛翔。ホバリングともいう。
モビング	疑攻撃、自分達よりも強いタカ類などに対して集団で排除攻撃をすること。カラスなどがよく行う。
託卵	他種の鳥の巣に卵を産みその親鳥にひなを育てさせる。カッコウ科の鳥に多い繁殖方法。
ペリット	食べた動物などの毛や骨といった、消化出来ないものをまとめた固形物。タカやフクロウ類、シギ類、カモメ類など多くの種がこのペリットを胃の後半分にある砂嚢(さのう)から吐き出す。

分類

亜種	同じ種であっても、地域によって形態などに明らかな違いがあるときは、一つの種をさらに分けて亜種とする。地理的品種のこと。
日本固有種	日本にしか生息していない種のことであるが海外で観察の不充分な国や離島などの観察困難な地域などあり確定は困難 セグロセキレイ、ノグチゲラ、ルリカケス、ヤンバルクイナ、アカハラ、など約12～13種
外来種	本来、日本には生息していない種で人為的に国内に持ち込まれた種。籠脱けや放鳥などが野生化したもの。生態系を乱すことが多い。ドバト、コジュケイ、ソウシチョウ、ガビチョウ、セキセイインコ、ホンセイインコ、カオグログビチョウ、ベニスズメ、シラコバトなどたくさんいる。

索引

	鳥名	ページ		鳥名	ページ
1	アオゲラ	38	43	サシバ	32
2	アオサギ	16	44	シジュウカラ	48
3	アオジ	81	45	シメ	77
4	アオバズク	34	46	ジョウビタキ	63
5	アカゲラ	37	47	シロハラ	59
6	アカハラ	61	48	スズメ	67
7	アトリ	73	49	セグロセキレイ	69
8	アマツバメ	22	50	センダイムシクイ	54
9	イカル	74	51	ダイサギ	17
10	イカルチドリ	23	52	タヒバリ	70
11	インシギ	26	53	チョウゲンボウ	39
12	インヒヨドリ	64	54	ツグミ	60
13	イワツバメ	49	55	ツバメ	50
14	ウグイス	52	56	ツミ	30
15	ウソ	75	57	トビ	29
16	エナガ	53	58	トラツグミ	58
17	オオタカ	31	59	ノスリ	33
18	オオバン	20	60	ハクセキレイ	71
19	オオヨシキリ	56	61	ハシブトガラス	44
20	オオルリ	66	62	ハシボンガラス	45
21	オナガ	42	63	ハヤブサ	40
22	カイツブリ	11	64	バン	19
23	カケス	43	65	ヒガラ	46
24	カシラダカ	82	66	ヒドリガモ	7
25	カッコウ	21	67	ヒバリ	80
26	カルガモ	6	68	ヒヨドリ	51
27	カワウ	13	69	ビンズイ	72
28	カワセミ	35	70	ベニマシコ	78
29	カワラヒワ	76	71	ホオジロ	83
30	キジ	3	72	ホシハジロ	9
31	キジバト	12	73	マガモ	5
32	キセキレイ	68	74	マヒワ	79
33	キビタキ	65	75	ミサゴ	28
34	キンクロハジロ	10	76	ミヤマホオジロ	84
35	クサシギ	25	77	ムクドリ	57
36	ゴイサギ	14	78	メジロ	55
37	コガモ	8	79	モズ	41
38	コゲラ	36	80	ヤマガラ	47
39	コサギ	18	81	ユリカモメ	27
40	コジュケイ	4	82	ルリビタキ	62
41	コチドリ	24			
42	ササゴイ	15			



子供に森の大切さを教育



子供に竹細工を指導



子供にツリークライミングの体験

著者:大川清久

編集:牛島哲雄

発行:小澤邦彦

NPO法人つるがしま里山サポートクラブ

<http://satoyamasupport.com/>